

22PO-pm393

自己健康測定機器活用によるセルフヘルスケア啓発の検討

○中尾 祐輝¹, 阿部 真也^{1,2}, 山口 浩^{1,2}, 佐々木 愛¹, 橋本 啓吾¹, 今野 章之¹, 野村 和彦¹, 吉町 昌子^{1,2}, 後藤 輝明^{1,2} (1株式会社ツルハ, 2株式会社ツルハホールディングス)

【目的】生活者セルフメディケーションの実施が求められる中で、これまで医療機関中心の実施であった様々な健康測定が、ドラッグストアで実施することが可能となった。そこで、ドラッグストアの利用者に健康測定を行い、薬剤師による最適な介入方法を検討する。

【方法】ツルハドラッグ手稲星置駅前店、ツルハドラッグ岩見沢大和店、ツルハドラッグ岩見沢駅前店の利用者を対象にして、自己健康測定を行った。脳年齢測定、血管年齢ストレス測定、体組成計、骨健康測定、肌年齢測定、血圧計を設置し、その利用結果を抽出し解析した。

【結果】全ての店舗において肌年齢測定は一月当たり 200 件以上の利用があった。また、BMI では、若年かつ女性において痩せの傾向などは見られたが、各年齢性別で大きく基準値を外れる値は確認されなかった。

【考察】今回の結果において、異常値が少ないのは、すでに治療を行っている、もしくは健康意識が高い方の利用が多い、などが原因であると考察した。そのため、健康測定による介入を行う場合、疾病のある方よりも未病の方が対象となることが示唆された。また、健康になるという目的は達成されている方も多く、別の目的を設定する必要があると考察した。実際、肌やストレスなど、一般の方が興味を引きそうな機器は使用頻度が高かった。したがって、セルフヘルスケアを第一目標としつつも、美容、ストレスなど興味を引きやすい第二目標を設定することが重要であると考察した。

以上より、ドラッグストアにおけるセルフヘルスケアの啓発は、疾病の方へ向けた介入よりも、未病の方へ向けた介入が適切であると考察する。今後は、利用者の関心事と測定との関係を示すことで、利用者数の向上や利用者の結果の改善がみられるかを検討していきたい。